



## 小鳥の巣箱掛けから学ぶ

野鳥の繁殖を願い、昨年2月23日に設置した小鳥の巣箱44個を12月15日に回収し、使用状況を確認したところ、営巣痕のあった巣箱が4個、ドングリが多数運び込まれていた巣箱が3個、枯葉・木の実が運び込まれていた巣箱が2個、小動物が営巣したと思われる巣箱が1個確認されました。



シジュウカラと  
思われる 営巣痕



ヒメネズミが運んだと  
思われるドングリの実

営巣した鳥は？、ドングリを運び込んだのは？、営巣した動物とは？等の疑問を解決するため、また、今後の森林環境教育や巣箱の設置場所等の参考とするために2月3日、軽井沢町を拠点に活動している「ピッキオ」へ出向き、実際の巣箱を見て頂き、状況を説明しその意見を聞くことができました。

その結果、営巣痕があった巣箱の内3個はシジュウカラ、1個はスズメの可能性があるとということ。ドングリを運び込んだのは、全てのドングリに銜えた時にできた傷跡があり、その痕跡からヒメネズミであるということ。枯葉を運び込んだのは、小鳥の子育てが終わった晩秋頃、ヒメネズミが営巣したと思われるということ。木の実（キハ

ダ）を運び込んだのは、巣箱についた爪痕、指の広さからリスと思われるということ。等が推察されました。



ピッキオの職員による巣箱の確認

また、巣箱の穴が削られているのは、リスがヒナや卵を狙ったためにできたこと。このほか小鳥の天敵は、木登りができて追うことのできるテン、イタチ及びヘビであること等知ることが出来ました。また、巣箱を設置するための条件等幅広く話を伺うことができました。

当ふれセンでは、城山史跡の森倶楽部で行う小鳥の巣箱掛け、回収、清掃及び修理の作業指導支援、地元小・中学校への出前授業等を行っていますが、今回教わったことを踏まえ、よりきめ細かな分かり易い作業指導や森林環境教育に努めていきたいと思えます。

## 木曽駒ヶ岳森林生態系保護地域 における植生復元対策事業検討会

平成22年2月23日、学識経験者、山岳会、自然保護団体、NPO、行政機関等を含めた関係

者19名による植生復元対策事業に関する検討会を開催しました。



検討会の様子

会議では、平成21年度の植生復元作業の実施状況やモニタリング調査結果について事務局から報告し、5年間の取組内容、調査結果等を基に今後の作業箇所や作業方法、維持管理の進め方等の検討を行いました。



質問等に答える 藤田自然再生指導官

各委員からは、「敷設した植生マットの劣化が見受けられるが、今後どう対応するのかの対策が必要ではないか」、「踏み荒らし等による被害箇所がどれだけあるのか、全てにマットの敷設をするのか、自然の推移に任せるのかの選別も必要ではないか」、「21年度実施した頂上山荘横は、学生登山の休憩地であり植生復元の看板を設置して欲しい」、「17・18年度実施した天狗荘裏は原植生がハイマツであった。ハイマツを復元させるためにも、草本の植生を回復させることにより、

原植生の復元につながるのではないか」、「八丁坂の植生復元を検討して欲しい」、「今後も植生復元の事業を続けて欲しい」等の意見が数多く出されました。

このような要望・意見を踏まえ、定点撮影、モニタリングの継続、工法の検討など次年度の事業計画を作成することで閉会しました。

## 「光陰矢の如し」

平成18年春、飛騨高山から残雪まばゆい霊峰御嶽山の裾野長峰峠を越え、木曽谷の地「ふれセン」に来て、あっという間の4年間でした。

当時ふれセンは開設2年余りで、手探り部分の状況もあって、4名の仲間が議論交わしながら地域の特徴を踏まえ独自性を出しながら色んな活動を展開してきました。おかげさまで、6年経過した現在「ふれセン」の認知度・・・・？。

一方、木曽谷は木曽川(227km)の源流部であり、濃尾平野への水瓶となって、生活・農業・工業の発展に寄与しています。近年中京圏との交流も頻繁に行われ、「水は土がつくる、土は森がつくる、森は人がつくる」を合言葉に森に係わるボランティアが増え、自然環境の大切さをわかってもらうことが一番です。

定年までなんとか務められたのも職場の同僚、地域の皆様のご支援あってのこと。四年間お世話になりありがとうございました。



所長 眞田公一